

三代広重の描く都市 — 江戸・横浜・東京 —

かみや らん
神谷 蘭 (学習院大学)発表
要
旨13
時
30
分
—
14
時
10
分松
ヶ
崎
・
西
キ
ャ
ン
パ
ス
内
セ
ン
タ
ー
ホ
ール

明治初期の浮世絵師、三代広重(1842-1894)は初代歌川広重の門人で、文久年間(1861-1864)頃に作画を始め、二代広重が慶応元年(1865)に師家を去った後、三代広重を襲名した。慶応から明治年間にかけて、洋風化していく横浜や東京の景観を巧みに描き、また「大日本物産図会」を手掛け明治10年(1877)の第1回内国勸業博覧会に出品するなど、文明開化の絵師として活躍した。しかし彼についての研究は殆ど行われておらず、作品も明治時代の歴史的資料という評価に留まっている。本発表では、三代広重の画業の中心である横浜浮世絵と開化絵に焦点を当て、西洋風の都市景観を描いた絵師としての重要性を提示したい。

開港当時の様子を描いた横浜浮世絵は、約10年間という短期間で、歌川派の多数の絵師により爆発的に制作された。制作期を前後期で分けると、前期は外国人物やその風俗を描いた作品が多いのに対し、慶応2年(1866)の大火後は都市計画が見直されたことから、後期は耐火性に優れた西洋風の建築や街並みなど、一都市としての横浜の景観が描かれるようになった。後期の特徴はこのころ画業を始めた三代広重の作品によるところが大きく、「横浜海岸通十八番異人旅宿之図」ではインターナショナル・ホテル、「横浜仏国役館之全図」ではフランス公使館など、石造りの堅牢な建造物を画面の中心に置き、人物がその前をさかんに往来する様子を描いている。三代広重は初代広重はじめ多くの浮世絵師が行ったような、俯瞰で空間を広く捉えるような描き方はあえて行わず、建造物を中心に置き、周辺の都市景観を捉える描き方を試みた。その結果、建造物は単に景観を構成する一部ではなく、主題となったのである。景観の捉え方が、マクロからミクロになったともいえるだろう。

そして明治5年(1872)に新橋・横浜間に鉄道が開通すると、西洋化する東京の景観や新風俗がさかんに描かれるようになった。三代広重はこれら開化絵と呼ばれる作品も積極的に手掛け、銀座の煉瓦通りや築地ホテルなど新たに生まれた東京名所を描き、浅草や日本橋など著名な江戸の名所が近代化してゆく様子も描いた。ここでも建造物や鉄道を中心に置き、また鮮烈な輸入顔料の色彩を用いて文明開化の都市の華やかな雰囲気を描き出した。

幕末・明治の浮世絵師に、開化絵を描いた者は数多いが、横浜浮世絵と開化絵の双方に多くの作品を残す絵師は、三代広重以外に見当たらない。彼は横浜浮世絵で獲得した西洋風の建造物や街並の描写法を糧として、開化絵にその経験を生かし、また江戸名所が近代化しゆく様子を描いてゆくなか、江戸から東京への移り変わりを巧みに表現している。これらの点で、三代広重は、江戸・横浜・東京を繋ぎ、西洋化しゆく景観を描いた絵師として、小林清親などと並んで重要な存在と考えられるのである。激動の時代に移り行く都市を捉えた、彼のまなざしを追っていきたい。